

[B年] 聖霊降臨節第19主日(2026年9月27日)**【旧約聖書日課】創世記 32章23～33節**

²³その夜、ヤコブは起きて、二人の妻と二人の側女、それに十一人の子供を連れてヤボクの渡しを渡った。²⁴皆を導いて川を渡らせ、持ち物も渡してしまうと、²⁵ヤコブは独り後に残った。そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。²⁶ところが、その人はヤコブに勝てないとみて、ヤコブの腿の関節を打ったので、格闘をしているうちに腿の関節がはずれた。²⁷「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」とその人は言ったが、ヤコブは答えた。「いいえ、祝福してくださるまでは離しません。」²⁸「お前の名は何というのか」とその人が尋ね、「ヤコブです」と答えると、²⁹その人は言った。「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」³⁰「どうか、あなたのお名前を教えてください」とヤコブが尋ねると、「どうして、わたしの名を尋ねるのか」と言って、ヤコブをその場で祝福した。³¹ヤコブは、「わたしは顔と顔とを合わせて神を見たのに、なお生きている」と言って、その場所をベヌエル（神の顔）と名付けた。

³²ヤコブがベヌエルを過ぎたとき、太陽は彼の上に昇った。ヤコブは腿を痛めて足を引きずっていた。³³こういうわけで、イスラエルの人々は今でも腿の関節の上にある腰の筋を食べない。かの人がヤコブの腿の関節、つまり腰の筋のところを打ったからである。

【使徒書日課】コロサイの信徒への手紙 1章21～29節

²¹あなたがたは、以前は神から離れ、悪い行いによって心の中で神に敵対していました。²²しかし今や、神は御子の肉の体において、その死によってあなたがたと和解し、御自身の前に聖なる者、きずのない者、とがめるところのない者としてくださいました。²³ただ、揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりません。この福音は、世界中至るところの人々に宣べ伝えられており、わたしパウロは、それに仕える者とされました。

²⁴今やわたしは、あなたがたのために苦しむことを喜びとし、キリストの体である教会のために、キリストの苦しみのできたところを身をもって満たしています。²⁵神は御言葉をあなたがたに余すところなく伝えるという務めをわたしにお与えになり、この務めのために、わたしは教会に仕える者となりました。²⁶世の初めから代々にわたって隠されていた、秘められた計画が、今や、神の聖なる者たちに明らかにされたのです。²⁷この秘められた計画が異邦人にとってどれほど栄光に満ちたものであるかを、神は彼らに知らせようとされました。その計画とは、あなたがたの内におられる

キリスト、栄光の希望です。²⁸このキリストを、わたしたちは宣べ伝えており、すべての人がキリストに結ばれて完全な者となるように、知恵を尽くしてすべての人を諭し、教えています。²⁹このために、わたしは労苦しており、わたしの内に力強く働く、キリストの力によって闘っています。

【福音書日課】マルコによる福音書 14章26～42節

²⁶一同は賛美の歌をうたってから、オリーブ山へ出かけた。

²⁷イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたは皆わたしにつまずく。

『わたしは羊飼いを打つ。

すると、羊は散ってしまう』

と書いてあるからだ。²⁸しかし、わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く。」²⁹するとペトロが、「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」と言った。³⁰イエスは言われた。「はつきり言うておくが、あなたは、今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう。」³¹ペトロは力を込めて言い張った。「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません。」皆の者も同じように言った。

³²一同がゲツセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、「わたしが祈っている間、ここに座っていないさい」と言われた。³³そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく恐れてもだえ始め、³⁴彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」³⁵少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、³⁶こう言われた。「アッパ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」³⁷それから、戻って御覧になると、弟子たちは眠っていたので、ペトロに言われた。「シモン、眠っているのか。わずか一時も目を覚ましていられなかったのか。³⁸誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていないさい。心は燃えても、肉体は弱い。」³⁹更に、向こうへ行って、同じ言葉で祈られた。⁴⁰再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠かったのである。彼らは、イエスにどう言えばよいのか、分からなかった。⁴¹イエスは三度目に戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。もうこれでいい。時が来た。人の子は罪人たちの手に引き渡される。」⁴²立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」

「聖書協会共同訳」（2018 年版）読み比べ

創世記32章23～33節

²³だが彼は夜中に起きて、二人の妻、二人の召し使いの女、それに十一人の子どもを引き連れ、ヤボクの渡しを渡って行った。²⁴ヤコブは彼らを引き連れ、川を渡らせ、自分の持ち物も一緒に運ばせたが、²⁵ヤコブは一人、後に残った。すると、ある男が夜明けまで彼と格闘した。²⁶ところが、その男は勝てないと見るや、彼の股関節に一撃を与えた。ヤコブの股関節はそのせいで、格闘をしているうちに外れてしまった。²⁷男は、「放してくれ。夜が明けてしまう」と叫んだが、ヤコブは、「いいえ、祝福してくださるまでは放しません。」と言った。²⁸男が、「あなたの名前は何と言うのか」と尋ねたので、彼が、「ヤコブです」と答えると、²⁹男は言った。「あなたの名はもはやヤコブではなく、これからはイスラエル〔「神は闘う」「神と闘う」の意〕と呼ばれる。あなたは神と闘い、人々と闘って勝ったからだ。」³⁰ヤコブが、「どうか、あなたの名前を教えてください」と尋ねると、男は、「どうして、私の名前を尋ねるのか」と言って、その場で彼を祝福した。³¹ヤコブは、「私は顔と顔とを合わせて神を見たが、命は救われた」と言って、その場所をペヌエル〔「神の顔」の意〕と名付けた。

³²ヤコブがペヌエルを立ち去るときには、日はすでに彼の上に昇っていたが、彼は腿を痛めて足を引かずっていた。³³こういうわけで、イスラエルの人々は今日に至るまで股関節の上にある腰の筋を食べない。男がヤコブの股関節、つまり腰の筋に一撃を与えたからである。

コロサイの信徒への手紙1章21～29節

²¹あなたがたも、かつては神から離れ、悪い行いによって心の中で神に敵対していました。²²しかし今や、神は御子の肉の体において、その死を通してあなたがたをご自分と和解させ、聖なる、傷のない、とがめるところのない者として御前に立たせてくださいました。²³ですから、あなたがたは揺るぐことなく、しっかりと信仰に踏みとどまり、あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりません。この福音は、天の下すべての造られたものに宣べ伝えられており、私パウロはそれに仕える者となったのです。

²⁴今私は、あなたがたのために喜んで苦しみを受け、キリストの体である教会のために、キリストの苦難の欠けたところを、身をもって満たしています。²⁵私は、自分に与えられた神の計画に従って、教会に仕える者となりました。あなたがたに神の言葉を余すところなく伝えるためです。²⁶永遠の昔から幾世代にもわたって隠されてき秘義〔あるいは神秘〕が、今や、神の聖なる

者たちに明らかにされたのです。²⁷神は彼らに、この秘義が異邦人の間でどれほど栄光に満ちたものであるかを知らせようとされました。この秘義とは、あなたがたの内におられるキリスト、すなわち栄光の希望です。²⁸このキリストを、私たちは宣べ伝え、知恵を尽くしてすべての人を諭し、教えています。それは、すべての人を、キリストにある完全な者として立たせるためです。²⁹このために、私は労苦し、私の内に力強く働くキリストの力によって闘っている〔別訳→競っている〕のです。

マルコによる福音書14章26～42節

²⁶一同は賛美の歌をうたってから、オリーブ山へ出かけた。²⁷イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたは皆、私につまずく。」

『私は羊飼いを打つ。』

すると、羊は散らされる』

と書いてあるからだ。²⁸しかし、私は復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く。」²⁹するとペトロが、「たとえ、皆がつまずいても、私はつまずきません」と言った。³⁰イエスは言われた。「よく言うておく。今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、あなたは三度、私を知らないと言うだろう。」³¹ペトロは言い張った。「たとえ一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは決して申しません。」皆の者も同じように言った。

³²一同がゲツセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、「私が祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。³³そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく苦しみ悩み始め、³⁴彼らに言われた。「私は死ぬほど苦しい〔別訳→悲しい〕。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」³⁵少し先に進んで地にひれ伏し、できることなら、この時を過ぎ去らせてくださるように祈り、³⁶こう言われた。「アッパ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯を私から取りのけてください。しかし、私の望みではなく、御心のままに。」³⁷それから、戻って御覧になると、弟子たちが眠っていたので、ペトロに言われた。「シモン、眠っているのか。一時も目を覚ましていられなかったのか。³⁸誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心ははやって、肉体は弱い。」³⁹さらに、向こうへ行って、同じ言葉で祈られた。⁴⁰再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。まぶたが重くなっていたのである。彼らは、イエスにどう言えばよいのか、分からなかった。⁴¹イエスは三度目に戻って来て言われた。「まだ眠っているのか。休んでいるのか。もうよかろう。時が来た。人の子は罪人たちの手に引き渡される。⁴²立て、行こう。見よ、私を裏切る者が近づいて来た。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・9月27日「聖霊降臨節第19主日」の日課主題は「苦難の共同体」。

・旧約日課は、「創世記」から、「ヤコブ物語」中の「ヤボクの渡しでの逸話」の伝承箇所。使徒書日課は、「コロサイの信徒への手紙」から、教会にとっての「苦難」の位置づけを教える箇所。福音書日課は、「受難物語」中の「オリーブ山での祈り」を伝える説話箇所。

旧約日課(創世記 32 章より)

- ・「創世記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の区分で「律法(トーラー)」の第一巻に位置づけられる伝承物語文書。通例、1～11章を「原初の物語」、12章以下を「族長たちの物語」と区分して扱う。「族長たちの物語」は、「アブラハム(アブラム)」から始まる家族四代の物語として展開するが、物語構成の観点からは、12～25章前半の「アブラハムの物語」と25章後半～50章の「ヤコブ物語」という二部構成、さらに下部構成として、25章後半～36章の「双子の兄弟ヤコブとエサウの物語」と37章以下の「ヤコブの息子たちの物語(ヨセフ物語)」という区分がみいだされる。
- ・日課箇所は、「双子の兄弟ヤコブとエサウの物語」の中に置かれた「ヤボクの渡しでの逸話」として知られ、「ヤコブ」に「イスラエル」の呼称が与えられたことを伝える二箇所(32:29、35:10)の内の一方である。
- ・「双子の兄弟ヤコブとエサウの物語」は、アブラハムの跡取りに位置づけられた「イサク」とその妻「リベカ」の間に生まれた双子、エサウとヤコブが、父からの祝福と相続を巡って争いながら、時を経て和解に至る、という筋立てで構成されており、主題設定は一世代前のアブラハム・サラ夫妻が直面した跡取り問題(養子か実子か、庶子イシュマエルか嫡子イサクか)と共通している。
- ・一連の物語で、ヤコブは、兄エサウと父からの祝福を争った末に両親の家を離れ、母方の伯父ラバンの家に身を寄せ、その娘たち(レアとラケル、またそれぞれの女奴隷ジルパとビルハ)と結婚して12人の子(男11人、女1人)をもうけた後に故郷へ帰還して、兄エサウと和解を果たす。日課箇所は、ヤコブが故郷への帰還の途上、翌日には兄エサウの一行と対面するであろう状況の中で、自分の一行を先に行かせた後に一人川の渡り場(ヤボクの渡し)に残った折の出来事として描かれている。
- ・この説話物語は、三つの起源譚として位置づけられている。第一に、ヤコブが神から「イスラエル」の名を与えられた命名譚として、第二に、この場所が「ペヌエル(神の顔)」と呼ばれる地名譚として、第三に、「腰の筋」を食べないという禁忌譚として。これらが、ヤコブが闇夜に近づいてきた「何者か」と格闘したという逸話の中に組み込まれているが、元来はそれぞれ異なる起源譚として伝承されていたものとも考えられる。一般に、「ヤコブ伝承物語」には、異なる起源(伝承体)の伝承が想定されている。

・「ペヌエル」は、この出来事の場合として設定された地名「ヤボク」に付けられた呼称として語られているが、これは、地名というよりは、神との対面行為を意味する聖所機能の呼称とも考えられる。列王記上12:25には、ソロモン王の死後、北王国「イスラエル」の王となったヤロブアムが「シケム」と「ペヌエル」を再建したと描かれており、「ヤコブ伝承」のもとに集結した「イスラエル王国」にとっての伝承聖所の一つとして「ペヌエル」を位置づけていたことが示唆される。

使徒書日課(コロサイ 1 章より)

- ・「コロサイの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の7番目に置かれた書簡文書。パウロがエフェソを拠点としていた時期などに関係を深めた「アジア州の教会」の一つである「コロサイの教会共同体」に宛てられているが、近隣「ラオディキアの教会」(4:16)にも回覧されることを前提に記されている。コロサイやラオディキアは、いずれもアジア州の環状街道沿いに形成されていた都市で、特に両都市は近接していた。「ヨハネの黙示録」には、「アジア州にある七つの教会」(黙1:4)が列挙されているが(同1:11)、本書簡の宛先である「コロサイの教会」は見当たらない。おそらく「ラオディキアの教会」と一体にみなされていたのだろう。「黙示録」で「ラオディキアの教会」は、裕福で満ち足りているが「熱心」さを失った教会、として描かれている(同3:14～22)。
- ・本書簡は、「エフェソの信徒への手紙」と酷似した構成で組み立てられており、実際にほぼ同じ内容の教えや勧告が見いだされる。学者の中には、一方が他方を参照して作成されたのではないかという仮説を提唱する者もある。「エフェソ書」には、教会共同体の一致を強調する記述が多く見られ、おそらく一致を脅かす何らかの事情を背景に、宇宙論的な「キリストの体」の概念を導入してとし「キリストの体としての教会」が一つであるべきことを説き、そこを起点にして教会構成員がその「教会」にふさわしい「新しい生き方」を身に着けるべきことが勧められている。本書簡には、「エフェソ書」ほど一致に対する脅威となる背景事情を推察させる記述が見られないが、同じアジア州にある「諸教会共同体」として同様の問題意識を念頭に置いた教えが展開されていると考えられる。
- ・日課箇所は、パウロ自身の信仰的な自己理解を表明する展開となっているが、「エフェソ書」では、このような記述は見られない。
- ・24節「キリストの苦しみのかげに身をまわす」の解釈は、長く議論的とされてきた。この句は、「わたしの肉においてキリストの苦しみがかげにまわすところを」(と直訳できる。パウロは、「あなたがたのために苦しむことを喜びと」する理由を、それによって、まだ十分に「キリストの苦しみ」の働きを受けとめていなかった自身の「肉(サルクス)」に「キリストの苦しみ」が働く機会になる、と考えていたのかもしれない。

福音書日課(マルコ 14 章より)

・日課箇所は、「受難物語」の中で「最後の晩餐」を終えた一行がオリーブ山へと向かいゲッセマネで主イエスが祈られたことを伝える伝承説話。「共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)」が共通して伝えるほか、「ヨハネ福音書」にも類比される箇所が「受難物語」中に見出される。

・日課箇所は、前段の「過越の食事(主の晩餐)」の場面を閉じて続く場面につなげる句(26節)から設定されている。この句が明らかにしているように、日課箇所前半(27～31 節)は、「オリーブ山」に向かう途上での対話として置かれており、後半(32 節以下)の場面を導入するための役割を担わされている。

・日課箇所を含む一連の展開を、「マタイ」と「マルコ」はほぼ同様に伝えているが、「ルカ」は独自の伝承を挿入しながら多少異なる展開で描いている。「ルカ」は、日課箇所前半の「ペトロの裏切りを予告される」場面を、「過越しの食事(主の晩餐)」の場面の内に留めると共に、独自の伝承でこれを拡大している。にもかかわらず「鶏が鳴くまでに、三度」(ルカ 22:34)という主イエスの発言はほとんど改変していない。「ヨハネ」も大きく異なる展開で一連の状況を伝えているにもかかわらず、「鶏が鳴くまでに・・・三度」(ヨハネ 13:38)という主イエスの発言を伝えている。「ルカ」と「ヨハネ」の伝えるペトロの発言は類似しており、「マタイ」と「マルコ」が伝えているのとは異なる伝承を共通に採用しているのかもしれない。

・この「ペトロの裏切りを予告される」場面を、「マタイ」と「マルコ」は、弟子たちが主イエス(の十字架の出来事)に「つまづく」にもかかわらず、主イエスは「復活した後」に弟子たちを再び導くために「先にガリラヤへ行く」という言説によって導入している。ここには、「マタイ」と「マルコ」が示す「復活」理解が現れている。すなわち、「復活」とは、一連の十字架死の出来事につまづいて主イエスを離反した者(見捨てた者!)が、逆の立場としては見捨てられずに、なお彼ら離反した者を先導する者として共に居続けてくださる、ということの意味するのであり、「復活信仰」とは、そのことを約束される主イエスの約束を信じることである。

・日課箇所後半は、通例「ゲッセマネの祈り」と呼ばれる場面。この場面を「ゲッセマネという所」(32 節。直訳「ゲッセマネという名の場所」)と特定しているのは、「マタイ」と「マルコ」のみで、「ルカ」は「いつもの場所」(22:40)、「ヨハネ」は「園」(18:1)としている。「ゲッセマネ」は、「油搾り場」を意味するアラム語と解され、地名というよりは「オリーブ畑」に付随する作業場のようなところだったと考えられる。

・36 節「わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」の直訳は、「わたしの願うことではなく、あなたの(願う)ことが」。

来週の誕生日 (9 月 27 日～10 月 3 日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-15「みことばにより」。20 世紀のイギリスでは最も広く歌われた讃美歌の一つとされる。作詞の J. モンゴメリーは 18 世紀後半にイギリスでモラヴィア兄弟団の伝道者の家庭に生まれ育ち、19 世紀にかけて文筆家・新聞編集者として活躍しながら讃美歌の作詞活動をした人物。
- ・21-492「み神をたたえる心こそは」(= I 11 番「あめつちにまざる」)は、18 世紀メソジスト運動の創始者ジョン・ウェスレーの作詞。英米国のメソジスト系を中心に歌い継がれている。曲は、19 世紀の作曲家ルイス・シュボアーのオラトリオ「救い主の最後のとき」の中から転用、讃美歌用に編曲されたもの。
- ・21-516「主の招く声が」は、S.ウェスレーに影響を受けて教会音楽家となった 19 世紀英国人パリーのオラトリオ「ユディット」の中の曲で「讃美歌集」(1924 年版)に採用された旋律に、新しい歌詞を付けて歌うべくグリーンが 1981 年に作詞した。英語原詞は 4 節だが、日本語訳では 5 節に拡大してまとめている。

21-15「みことばにより」**Songs of Praise the Angels Sang**

1. Songs of praise the angels sang, / heaven with alleluias rang, / when creation was begun, / when God spake and it was done.
2. Songs of praise awoke the morn / when the Prince of peace was born; / songs of praise arose when he / captive led captivity.
3. Heaven and earth must pass away; / songs of praise shall crown that day: / God will make new heavens and earth; / songs of praise shall hail their birth.
4. And shall we alone be dumb / till that glorious kingdom come? / No, the church delights to raise / psalms and hymns and songs of praise.
5. Saints below, with heart and voice, / still in songs of praise rejoice; / learning here, by faith and love, / songs of praise to sing above.
6. Hymns of glory, songs of praise, / Father, unto thee we raise, / Jesu, glory unto thee, / with the Spirit, ever be.

21-492「み神をたたえる祈りこそは」**O for heart to praise my God**

1. O for a heart to praise my God, / a heart from sin set free, / a heart that always feels thy blood / so freely shed for me.
2. A heart resigned, submissive, meek, / my great Redeemer's throne, / where only Christ is heard to speak, / where Jesus reigns alone.
3. A humble, lowly, contrite heart, / believing, true, and clean, / which neither life nor death can part / from Christ who dwells within.
4. A heart in every thought renewed / and full of love divine, / perfect and right and pure and good, / a copy, Lord, of thine.
5. Thy nature, gracious Lord, impart; / come quickly from above; / write thy new name upon my heart, / thy new, best name of Love.

21-516「主の招く声が」**How clear is our vocation, Lord**

1. How clear is our vocation, Lord, / when once we heed your call: / to live according to your word, / and daily learn, refreshed, restored, / that you are Lord of all, / and will not let us fall.
2. But if, forgetful, we should find / your yoke is hard to bear; / if worldly pressures fray the mind, / and love itself cannot unwind / its tangled skein of care: / our inward life repair.
3. We marvel how your saints become / in hindrances more sure; / whose joyful virtues put to shame / the casual way we wear your name, / and by our faults obscure / your power to cleanse and cure.
4. In what you give us, Lord, to do, / together or alone, / in old routines and ventures new, / may we not cease to look to you, / the cross you hung upon / all you endeavored done.